

# 『角田浩々歌客 主要執筆稿集成』構想ノート

高松 敏男（元中之島図書館）

## I

明治中期から大正期にかけて、民友社の「国民新聞」（岳麓布衣の筆名も使う）、雑誌「国民之友」（浩々而歌閣主の筆名もあり）、を振り出しに、「大阪朝日新聞」（不二行者、出門一笑の筆名も使う）、「大阪毎日新聞」（迂鈍居士、鈍右衛門の筆名も使う）、「東京読売新聞」（剣南、伊吹郊人、豹子頭の筆名も使う）、「東京日日新聞」とたえず大新聞の文芸欄を舞台に活躍を続けた一大文芸時評家、ジャーナリスト角田浩々歌客の業績の全貌を紹介した資料は、私が以前に「大阪府立中之島図書館紀要」で3回にわたり掲載した「書誌」以外には未だ見当たらない。部分的にスポットをあてた論稿としては、明治30年代を中心に大阪での活躍の様子を論述した拙稿「明治中期における大阪の文界と出版の動き」（「大阪府立中之島図書館紀要」昭和49.3）、「角田浩々歌客の未掲載稿「大阪の新聞紙と文学」と関西文学の状況」（関西大学「国文学」平成21.3）の2論稿とホーソンの受容、チェーホフの受容史の面から我が国における先駆的役割を果たしたことを考証した論稿(1)が見える程度で、その他の多岐にわたる浩々歌客の活躍については、匿名での新聞紙掲載稿が多いこともあってか、あるいは浩々歌客自身も単行本にまとめて刊行することに無頓着であったせいでもあってか、のちの文学史家や研究者もその存在の大きさを知りつゝも、調査と資料の収集の労が大きすぎる理由も手伝って、研究対象からは敬遠されたまゝである(2)。そのため文芸時評を武器に、明治中期から大正期に至る長期にわたって、主に大阪から中央文壇に向かって鋭い発信をなす傍ら、「読売」でも匿名を使い、論戦を繰り広げて生きた彼の業績も、今日なお正当には評価されないまゝに終わっている。

しかし、このたびこゝに構想した方向で、多岐にわたる浩々歌客の残した執筆稿の主なものを整理し、まとめることが可能となれば、その昔、中之島図書館の書庫に籠って(3)為し遂げることができた「書誌」の成果も、ようやく実を結ぶことゝなり、「角田浩々歌客をして角田浩々歌客を語らせしめよ」という永年の思いの実現に向けて一歩前進することになる。そこでまず『主要執筆稿集成』に切り込むに当たり、自作の「書誌」を基礎にして、全仕事を5つの主題に分け、的を絞って考察を加えてみることにする。

## II

### (1) 小説

浩々歌客が小説を書いたのは、後にも先にも 30 歳前後の若い時に不二行者（ふぎょうじゃ）の筆名を使い、『老天』の題で「国民之友」に 3 回連載（明治 29. 9. 20、9. 27、10. 17）し中断、続稿をのち新たに「石ふみ」に改題し、同誌に明治 31 年 4 月 10 日から 6 月 10 日、8 月 10 日にかけて連載したこの 1 篇に限られるが、この作品は検証してみれば、宮崎湖処子の小説『白雲』と共にホーソンの影響を強く受け、それに続く作品『人寰』なども視野に入れることにより比較検討して読まれるべきものである。そしていずれの小説もホーソンの『緋文字』なしには成立は考えがたく、混然一体の影響下にあり、特にその評価は湖処子の『人寰』に比すべき傑作と考えられる（(1)拙稿「「老天」の新視界」参照）。

ところが、その後の彼は一切小説を書くことがなく、文芸時評家・ジャーナリストとしての活躍が顕著であったために、初期に発表の小説の存在は忘れられ、幸田露伴の「風流仏」にも比すべき力のこもった傑作であるにもかかわらず論評されることもなく、残念なことに埋もれたまゝになっている。それゆえに若き浩々歌客の残した格調の高い唯一の記念的作品として収録からははずすことができない。

なお、この「老天」は、のちに大阪の金尾文淵堂刊『詩国小観』（明治 33. 6. 16）の巻頭に掲げられている。

### (2) 時文観

角田浩々歌客のライフワークは、何とんでも文芸時評にある。こゝでは明治 30 年代に「時文観」、「一家言」その他の題で執筆されたものゝ中から、特に関西文学に関係する意味深いものを中心に選んでみた。と同時に、平尾不孤と共に金尾文淵堂より創刊を見た文芸総合誌「小天地」の中からも主要な論稿を収録する方針で考えてみた。言うまでもなく、これらの時評文は、浩々歌客が宮崎湖処子のあとを引き継ぐかたちで「国民之友」での活躍後、明治 32 年に突然「大阪朝日」に招かれて来阪、「月曜文壇」の創設と共に文芸記者として着任してから、日露戦争勃発までの最も精力的に活躍し、充実を見た時期から選んだ論稿が中心である。内容の真価は、掲載稿が語るはずであるから、以下に列記してみる。

〔時文観〕 希望の文界 警醒時代 関西文学（「大阪朝日新聞」明治 32. 1. 9）

〔時文観〕 再び文学界に就て（「大阪朝日新聞」明治 32. 3. 13）

〔時文観〕 浪華青年文士（「大阪朝日新聞」明治 32. 4. 10）  
〔時文観〕 歳晩の文壇（「大阪朝日新聞」明治 32. 12. 25）無署名  
三十二年評論の文壇（「大阪朝日新聞」明治 32. 12. 31）無署名  
〔一家言〕 文学の平凡化と気概の缺乏 新年の小説界（「大阪朝日新聞」明治 33. 1. 8）  
〔一家言〕 文士無妻論を破す 『鷗外漁史とは誰ぞや』 とは何ぞ（「大阪朝日新聞」明治 33. 1. 15）  
辛丑文壇を迎ふ（「小天地」明治 34. 1）  
過程の一年（上、中、下）（「大阪朝日新聞」明治 34. 12. 23、12. 30、12. 31）  
壬寅文壇を迎ふ（「小天地」明治 35. 1）  
演劇協会の成立（「大阪朝日新聞」明治 35. 2. 3）  
〔打月棒〕 文人会合と第五博覧会（「読売新聞」明治 35. 10. 26）筆名・劍南道士  
希望の文壇（「小天地」明治 36. 1）  
文芸家に檄す（文芸家大会を大阪に開くの議）（「朝日新聞」明治 36. 2. 23）  
〔打月棒〕 文壇の提醒（「読売新聞」明治 36. 10. 4）筆名・劍南  
関西読詩社会に告ぐ（「大阪毎日新聞」明治 38. 8. 13）

### （3）論戦

その思想は穏健、性格は温厚といわれた角田浩々歌客も、中央文壇で巻き起こる文学論争には、幾度となく激しい論調で挑み自らも進んで論争を起こしたこともある。こゝではその生涯にわたる論戦の中から、主たる論稿のみに絞って収録する。中には散発的に終わったものもある（各論争の具体的な経緯については省略する）が、その一方で、浩々歌客の本領と特色が忌憚なく発揮されているものもあり、今日でも、日本文学論争史の上で欠くことのできない論稿も見える。

論争と論稿は以下に列記する如くである。

月夜の美観論争（明治 32. 11～33. 5）

「月光青色論に就て（文学と科学の触接）」（「大阪朝日新聞」明治 32. 12. 11）

自然主義論争（明治 34. 5～大正 1. 9）

「風頭語—『露骨なる描写』とは何ぞや」（「読売新聞」明治 37. 2. 21）筆名・劍南

「自然主義を評して超絶的自己発展に及ぶ」（「明星」明治 40. 12）

「評論之評論（泡鳴、天溪の駁論に就て）」（「大阪毎日新聞」明治 40. 12. 8）

美的生活論争（明治 34. 8～34. 11）

「美的生活とは何ぞや（上、下）」（「大阪朝日新聞」明治 34. 8. 12、8. 19）

「文壇何ぞ浅語多きや」（「小天地」明治 34. 11）

「君死に給ふこと勿れ」論争（明治 37. 9～38. 2）

「情理の弁（大町桂月子に与ふ）」（「読売新聞」明治 37. 12. 11）筆名・剣南

象徴詩論争（明治 38. 6～39. 5）

「比興詩を論じて現今の詩風に及ぶ（上、中、下の 1～4）」（「読売新聞」明治 38. 10. 8～12. 3）筆名・伊吹郊人

「比興詩餘論（1、2）天溪、孤村二君に寄す」（「読売新聞」明治 38. 12. 10、12. 17）  
筆名・伊吹郊人

#### （4）紀行文

不二行者の筆名で文芸時評と平行して、若い頃から書き続けられた紀行文は、浩々歌客の生活に密着した仕事の一つであった。元来、富士山の裾野（駿河富士郡大宮町）に生まれ育ったこともあるが、石の蒐集を日頃から趣味としていた彼にとっては、近郊の山野に出歩くのは自然な一面であり、生涯にわたって得意とする分野であっても不思議ではない。

「讃岐名勝」(4)、「寒霞溪」(5)などのやゝ遠方の力のこもった紀行文もあり、「富士の巻狩」(6)など郷里を主題に綴ったものも多く見えるが、こゝでは大阪近郊のものにとどめる。

なお「大阪見物」については、「国民之友」廃刊後、明治 31 年 12 月、「大阪朝日新聞」に招かれて、縁もゆかりもなかった大阪の土地にはじめて足を踏み入れた時の様子が綴られているので、特に収録する。

和浦の一瞥（『出門一笑』明治 34. 6 金尾文淵堂）所収

古都の半日（『出門一笑』明治 34. 6 金尾文淵堂）所収

吉野渡頭（「大阪朝日新聞」明治 36. 9. 28）

淡輪日記（「大阪朝日新聞」明治 37. 7. 31）

武田尾（「大阪毎日新聞」明治 42. 5. 23）筆名・迂鈍

大阪見物（『畿内見物 大阪之巻』明治 45. 7. 25 金尾文淵堂）所収

#### （5）北欧文学

角田浩々歌客のスκανジナピア文学への関心は早く、「国民新聞」への投稿にまで遡ることができた。彼が日本における最も早い紹介者であることを、忘れるべきではない。下記に列記する稿を読めば判然とすることであるが、フィンランド文学の一大金字塔、『カレワラ』（各地に伝承された口碑・伝説の古謡を集大成して選んだ 1 編の叙事詩）をはじめ、

ブランドス、ヤコブセンなどのデンマークの文学をも逸早く紹介している。

こゝでは早い時期の匿名での投稿以外に、『鷗心録』に収録されている論稿を中心に構成した。

◎スカンディナビヤン文学（「国民新聞」明治23.12.27、12.29）[忘々生投]

西文消息（丁抹近代文学）（上、中、下）（「大阪朝日新聞」明治34.6.3、6.10、6.17）

芬欄文学の片影（「太陽」明治39.2.3）

評論の評論（北歐文豪の日本文学観（「大阪毎日新聞」明治39.2.4）

### III

ところでこうして、角田浩々歌客『主要執筆稿集成』についての構想の作業を進めてみた結果、改めて驚かされたのは、彼の執筆範囲の広さ、筆名の多さなどではない。執筆稿を年代順に追跡調査しながら終始気にかゝったのは、「大阪朝日新聞」に着任した当初とは打って変わった日露戦争勃発時の浩々歌客の社に於ける冷静な対応であり、何故という思いだけが付きまとったことだった。

当時、大阪本社に籍のある出張員という肩書きで東京支局にいた厭戦家（中村光夫氏の説による）の二葉亭四迷ですら、日露が開戦するや、逸早くロシアの「ノーオーエ・ウレミヤ」や「ハルビン通報」等の日報類を取り寄せて、懸命にロシアの国情、満韓経営問題、果てには両国の戦費、財力、輸送力などの綿密な比較分析を独自に行い、自国に役立つ記事・論稿を「大阪朝日新聞」の方へ送っていたことについては、拙稿「二葉亭四迷の『手帳』と「大阪朝日新聞」」（関西大『国文学』昭和52.9）等で述べた。その二葉亭と対比して、浩々歌客をして敢えて桐生悠々と同様に反戦論者と記す気はないが、開戦と同時に戦争記事一色に塗りつぶされた主戦論の「大阪朝日新聞」社にあって、彼の対処の様子こそ、特に注目に値する。一夜にして反戦論から主戦論に転じた黒岩周六の主宰する「万朝報」<sup>よろずちようほう</sup>での、即日「退社の辞」を掲げた幸徳秋水、堺利彦、内村鑑三らのような華々しい意志表示は見せなかったが、日露戦争に於ける反戦思想家といえ、幸徳らばかりが注目される現状を見ると、一方では浩々歌客のような独自の生き方を貫いたジャーナリストがその背後に存在したことも黙殺されるべきではない。繰り返すが、浩々歌客は特派員の布陣と戦報記事一色に明け暮れる「大阪朝日新聞」社にあって、静かに文芸記者としての孤塁を守り、好戦家らの冷遇に耐え、社の体質に合わずに去ったのである。

但し、片や「東京読売新聞」における匿名“劍南”での「情理の弁」では、与謝野晶子の「君死に給ふこと勿れ」を「国家的觀念の藐視すべき危険なる思想」と批判する大町桂月に対し、「彼の歌が直に以て危険な思想を表すとは見る能はず」、「晶子の歌は偏に商家の主人たるべき弟の死なぬやふにといふ情を強く切に表白し」、「まことの心を歌いせしまでなり」と論駁、晶子の心情を即刻大胆に弁護して譲らなかつた姿が浮びあがってくる。この的を射た指摘は、近年、晶子の弟宛手紙が発掘公表されたことで、裏付けられている。

最後に、日露開戦にともなって、「大阪朝日新聞」社系の記者らが結集して創刊を見た戦捷雑誌、「<sup>輸入</sup>日露戦記」に掲載の「戦時の天然」が、仲間の勇ましい愛国的作品満載の中にあつて、角田浩々歌客の感性と立場が何処にあつたのかを位置づけられる貴重な作品であることを指摘して置く必要がある。

注

- (1) 「「老天」の新視界—角田浩々歌客と宮崎湖処子に於けるホーソンの受容」(「翻訳と歴史」平成 15. 11)、  
「わが国最初のチェーホフ文献と初期受容—角田浩々歌客の先駆的工作を中心に」(「翻訳と歴史」平成 16. 11)
- (2) 但し、吉田精一氏のみ『近代文芸評論史 明治編』(昭和 50. 2 至文堂)で「角田浩々歌客」の項をもうけ一応の輪郭を素描している。
- (3) 府立中央図書館が新しく完成するまでは、「大阪朝日」は明治 12 年 1 月 25 日の創刊から、「大阪毎日」は同 37 年 3 月 1 日から、本紙そのものが、中之島図書館の 1 号庫 1 階に所蔵されていた。
- (4) 「大阪朝日新聞」明治 33. 5. 5~5. 29
- (5) 『鷗心録』(明治 40. 7 金尾文淵堂)所収
- (6) 「大阪朝日新聞」明治 33. 4. 2~4. 6